

第 7 回 SPARC Japan セミナー2009

人文系学術誌の現状 - 機関リポジトリ、著作権、電子ジャーナル

Monumenta Nipponica の Project MUSE 参加への経緯および現状

Kate Wildman Nakai (ケイト・ワイルドマン・ナカイ)
(上智大学国際教養学部教授、上智大学モニュメンタ・ニボニカ所長)

講演要旨

Monumenta Nipponica は、2005 年、Johns Hopkins 大学が提供する電子ジャーナル・サービス、Project Muse に参加し、今年で 5 年目を迎えました。

今回は、Project MUSE 参加に至った経緯、参加が誌面内容および構成に及ぼした影響を及ぼしたのか、電子ジャーナルとして入手可能になったことによる印刷物の定期購読へ影響について説明します。また、Project MUSE 参加によるモニュメンタ・ニボニカの収支面への影響と、私たちの認識する将来への課題についてもお話しします。



Kate Wildman Nakai (ケイト・ワイルドマン・ナカイ)

スタンフォード大学にて学士号および修士号取得後、ハーバード大学にて博士号を取得。主な研究分野は、日本近世史、特に江戸思想史である。ハーバード大学、オレゴン大学にて教職に従事。来日、1980 年より上智大学で教える。現在、国際教養学部教授である。1997 年に Monumenta Nipponica の編集長に就任以来現在まで編集長を務める。

ジャーナル設立からオンライン化まで

まず、ジャーナルの設立からオンライン化までの経緯をお話ししたいと思います。Monumenta Nipponica は、日本の文物を海外に広めることを目的に上智大学が 1938 年に設立した、日本文化に関する国際学術誌です。内容は、歴史、文学、宗教史、美術史などで、原典や資料の翻訳もよく掲載します。太平洋戦争中に一度出版を中断しましたが、1952 年から再開し、今年第 64 巻を発行しています。設立時点の使用言語には、英語、ドイツ語、その他の西洋諸言語

も含めていましたが、第 19 巻 (1964 年) 以降は英語に統一しています。

現在は年 2 回発行しており、各号約 200~220 ページで、論文 4~5 本、書評 20~25 本を掲載しています。投稿を広く国内外に呼び掛けていますが、内容と使用言語の関係上、論文・書評ともに海外の研究者が主です。投稿論文の掲載率は約 25% です。

もともと海外からの購読が多く、冊子購読者の 4 分の 3 は海外の大学図書館、研究機関、個人などです。国際交流基金が 100 冊を買い上げ、主に先進国以外の

国々に配布する援助プログラムのおかげもあって、冊子を 60 カ国に送っています。

このような歴史事情もあり、1998 年、学術誌バックナンバーのオンラインデータベースとして設立されたアメリカの非営利団体 JSTOR の呼び掛けを受け、1999 年に上智大学が提携して、Monumenta Nipponica が JSTOR の Arts and Sciences のコレクションに入ることになりました。現在、世界中で 5800 機関が JSTOR を購読しており、Arts and Sciences のコレクションを購読している機関であれば、1938 年の創刊号以降の Monumenta Nipponica が、最近 5 年分を除いて全号オンラインで閲覧できます。最近 5 年分を除くという方針は、もともと冊子購読者数が減らないための措置ですが、JSTOR との提携から 10 年が経過した現時点では、この問題にかかわる事情は大きく変わりました。

Monumenta Nipponica の本格的なオンライン化のきっかけは、2003 年に SPARC のパートナー誌に採択されたことです。SPARC のサポートを受け、2005 年よりアメリカのジョンズ・ホプキンス大学の電子ジャーナルデータベース Project MUSE に加わり、オンラインで最新号の提供を始めました。Project MUSE はもともとジョンズ・ホプキンス大学の電子ジャーナルデータベースで、2000 年から学外の出版物も載せています。

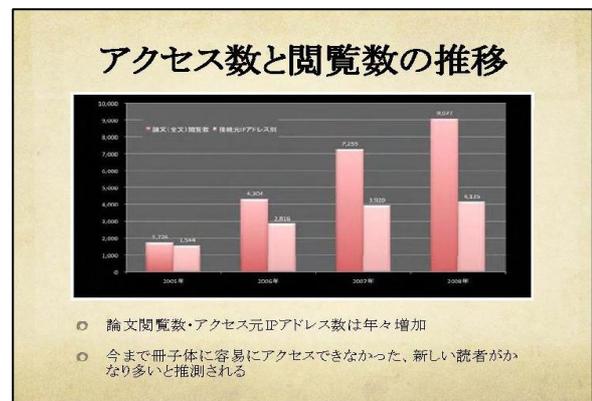
現在、Project MUSE の提供するジャーナルは 472 誌（106 出版企業）に及び、6 種類の購読コレクションの形で配信されています。Monumenta Nipponica は 4 つのメイン購読コレクション（Standard、Premium、Basic College、Basic Research）のすべてに入っており、世界に 1565 ある Project MUSE 購読機関のほとんどが 4 つのうちいずれかを購読していますので、ほぼ全部の機関からアクセス可能ということです。また、JSTOR と Project MUSE の関係は深く、一方からもう一方へとリンクすることが容易で、その結果、Project MUSE への参加が 6 年目となる 2010 年、いよいよ JSTOR と併せて全号がオンラインで閲

覧可能になります。

オンライン化の影響 購読者数

では、オンライン化は Monumenta Nipponica にどのような影響を及ぼしているでしょうか。まず、読者数の推移から考えてみたいと思います。

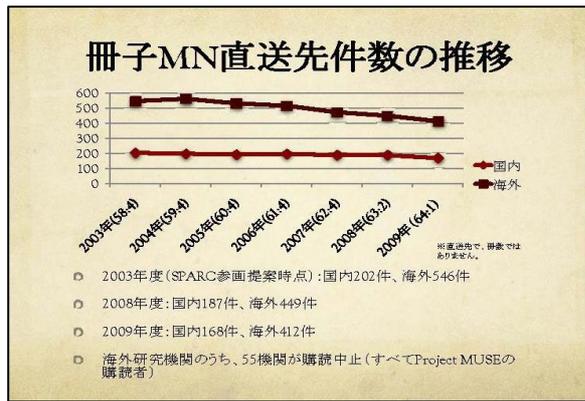
冊子の読者数に関する確かな統計はありませんが、Project MUSE はどこからどのような論文がダウンロードされているかというデータを豊富に提供してくれますので、読者数ある程度把握することができます。この 5 年間のデータを見ますと、論文閲覧数やアクセス元 IP アドレスの数が年々増加していることが確認できます（図 1）。もちろん、その間にアクセス可能な論文の数も随分増えていますが、機関名などから推測すると、恐らく今まで冊子体に容易にアクセスできなかった、新しい読者がかなり多いのではないかと推測されます。これは、オンライン化のとても喜ばしい効果です。



(図 1) アクセス数と閲覧数の推移

購読者数になると、冊子体とオンライン体の関係はもっと複雑です。上智大学からの冊子直送先件数は、2003 年（SPARC 参画提案時点）で国内 202 件、海外 546 件でしたが、Project MUSE に参加した 5 年の間にかなり減少し、2008 年は国内 187 件、海外 449 件、現時点で国内 168 件、海外 412 件となっています（図 2）。海外研究機関のうち 55 機関が購読を中止していますが、すべて Project MUSE の購読者で、冊子体の

代わりにオンライン体だけに頼ることになりました。別の言い方をすれば、オンライン体を通して各論文読者の絶対数は増加していますが、雑誌そのものの購読者は減っています。この傾向はこれからも続くと思われる、将来、オンライン体へのますますの移動が予想されます。



(図2) 冊子 MN 直送先件数の推移

オンライン化の影響 経費回収

経費回収の面から、このような事情は何を意味するのでしょうか。Monumenta Nipponica はもともと購読料だけでは採算が取れず、上智大学からそのための予算を得ていますが、もちろん購読料の減少は気になるところです。しかし、幸い Project MUSE は非営利事業であり、収入の約70%を使用料(ロイヤリティ)として参加出版社に配分しています。各ジャーナルへの配分額は、MUSE における使用率、図書館購読者数、



(図3) MUSE ロイヤリティスコア評価基準

インデックスなどによる引用数値等を元に計算されています。

これがロイヤリティスコアという評価基準の仕組みです(図3)。Presence in Indexes は最高8ポイントを得ることができます。Exclusivity Score は、MUSEのみに収録の場合は最高の2点、MUSE以外のデータベースで過去1年間発行分の閲覧を制限している場合も2点ですが、ほかのデータベースに公開していると1点、または0点になります。

Monumenta Nipponica は、Presence in Indexes で5点、Exclusivity Score で2点、合計10点満点中7点を得ています。そのため、年々の使用料は予想もなかったほど大きなもので、最初の1年は3000ドルちょっとでしたが、今年の見込みは2万3000ドルにも達しています(図4)。これもオンライン化の喜ばしい効果でした。

元来、冊子購読料は割と安いもので、特に機関と個人レートを区別していません。また、機関の大多数は代理店を通して購読しており、その代理店に対しては割引も与えていますので、機関購読料から得ている収入は決して多くありません。結果として、今のところ Project MUSE からの収入は冊子購読者数の減少からくる損失額よりもはるかに大きく、その点に関しては一安心しています。



(図4) Project MUSE ロイヤリティ入金額の推移

オンライン化の影響 編集・体裁・内容

購読の状況に比べて、編集の過程などにオンライン化が及ぼしている影響は、今のところ、それほど大きくはないように思われます。「投稿論文数は増えていきますか」という質問を受けますが、残念ながらそうとは言えません。かえってこの数カ月は投稿率が落ちていきます。その理由は分かっておらず、恐らく学界全体あるいは日本研究にかかわる事情ではないかと思われませんが、懸念するところです。

しかし、投稿数の減少はオンライン化とは関係ないものだと確信しています。自分の論文が Project MUSE を通してすぐにオンラインで閲覧できることは、著者にとって望ましいことで、Monumenta Nipponica に発表するメリットの一つと考えられているはず。聞くところによると、オンラインで閲覧できない発表媒体は避けられる運命にあるという見方が強いようです。

編集や体裁に関しては、オンラインで閲覧する場合、冊子体と比べて、ジャーナル全体を見るよりも個別的な論文が焦点になることが多いと思われ。論文は、ある程度独立したものとして閲覧される可能性があることを念頭に置く必要があります。例えば、今までジャーナルの最前部か後ろに記載していた著作権や出版に関する情報を、論文ごとに記載するようになりました。このようなことに関するさらなる配慮が必要かもしれません。

内容については、かなり地味な、はやりには走らない、学術的に堅い伝統を守ってきたと自負しています。原典の翻訳などは、今すぐどれほど読まれるかよりも、長い目で見て数十年先まで価値が残り、英語における日本研究の確実な積み重ねに貢献することを掲載基準として考えてきました。しかし、オンライン化はこの姿勢に微妙な圧力を与えかねないのではないかと若干懸念しています。

Project MUSE にアクセスすると、購読の有無に関係なく、どこからでもジャーナルやその論文に関する程度の情報を見ることができます。その一つが、

前月の論文ダウンロード数順リストです。Project MUSE に入り、「Browse Journals」をクリックして Monumenta Nipponica に行き、その中の「Frequently Downloaded Articles」をクリックすると出てきます。これを見ると、例えば前月一番よく読まれた論文は「Graphically Speaking: Manga Versions of The Tale of Genji」で、以下、漫画、女性史、身体にかかわる論文が圧倒的な人気を持つという傾向がはっきり読み取れます。

ここに掲載されている論文はすべて質が非常に高いものですので、よく読まれることは当然で喜ばしいことですが、Monumenta Nipponica が扱う中のごく限られた分野であり、これだけが焦点になっては困ります。また、冊子体の場合には、ある論文を探しているうちに、その周りにいろいろ違う論文があることにも気が付いて視野が広がりますが、オンライン化で論文の「一本釣り」が可能になったことによってその経験が失われていくとしたら、残念に思います。

英語ジャーナルデータベースの日本における課題

皆さまの最大の関心事の一つは、日本で発行している英語学術ジャーナルをどうやってもっと海外に発信できるかということではないかと思われ。それはよく分かりますが、発信は一方通行ではなく、two-way street のものです。そして、その street をさらに有効なものに改善するために、発信する体制と並行して受け入れ体制にも目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

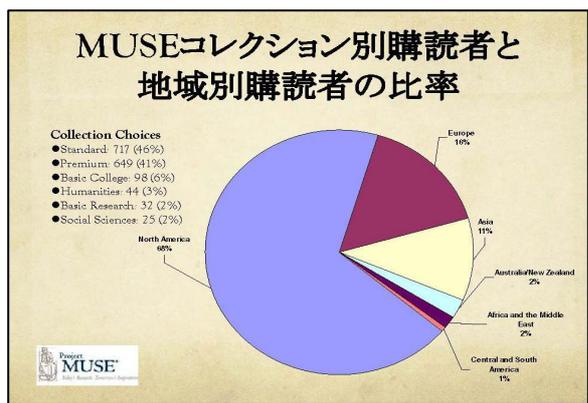
Project MUSE を例として挙げれば、日本の購読機関は非常に限られていると言わざるを得ません。MUSE の購読者を地域別に見ると、アジアは全体の 11% を占め(図 5)、昨年アジアにおける新規購読者数は 24 件あります(図 6)。しかし日本はどうかというと、2008 年は全部で 7 機関、今年は今のところ 2 機関増えて 9 機関です。そのうち一つはわが上智大学ですが、試験購読期間中です。参考までに申し上げる

と、韓国は 2008 年の 13 機関が今年は 16 機関に増えています。日本の倍です。台湾は 9 機関、中国は 13 機関から 35 機関に増え、香港は 4 機関です。もちろん中国は人口が大きいのですが、やはり日本にももう少し頑張ってもらいたいと思っています。

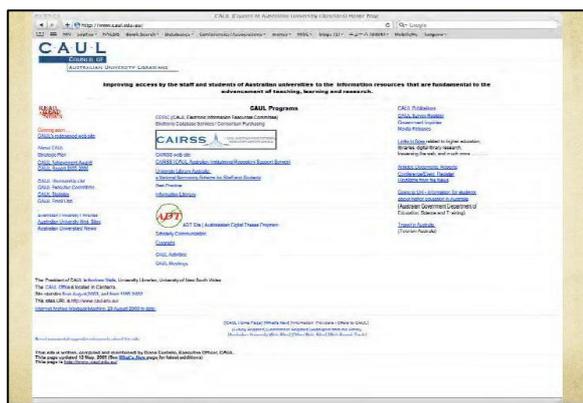
上智大学の場合、海外ジャーナルをよく使う研究者や、自分の大学で MUSE を使い慣れている留学生の間では、上智が購読していないことが不満になっており、そのことで最近試験購読を試みる運びとなりました。しかし、購読していない理由もよく分かります。MUSE の購読料は決して安くはなく、それを頻繁に使う人数もそれほど多くはありません。今年、上智大学で出してもらった見積書を見ると、一番大きい Premium Collection だと 3 万 4000 ドル、現在試験購読している Basic College Collection で 1 万 1000 ドルになります。

このジレンマを乗り越えるいい方法はないでしょうか。紀伊國屋書店が経営する共同契約を使えば、購読料に対して 10% の割引を受けられるそうですが、海外の例を見ると、幾つかの大学や研究機関で共同体制を作っています。日本も斬新な共同体制を作れば、もっと強い立場から MUSE と交渉することができるのではないのでしょうか。

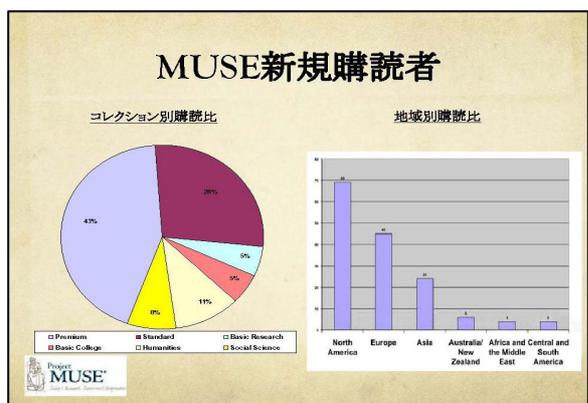
MUSE のホームページにある「Project MUSE Consortium Relationships」の中には、「International Consortia」という項目があり、オーストラリア、パレーン、デンマークなどとつづき、そして下の方に日本があります。それぞれをクリックして見ると、その国の事情を想像することができます。例えば一番上の「Australia」をクリックすると、こういうページに行きます（図 7）。Council of Australian University Librarians を作り、Improving access by the



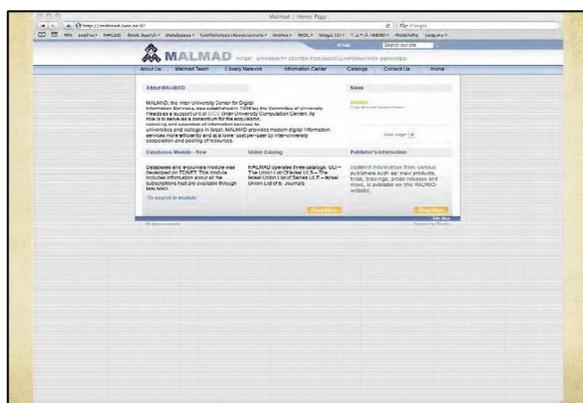
(図 5) MUSE コレクション別購読者と地域別購読者の比率



(図 7) CAUL(オーストラリア)のホームページ



(図 6) MUSE 新規購読者



(図 8) MALMAD(イスラエル)のホームページ

staff and students of Australian universities という
ことで、一つの共同体を通していろいろな大学が
MUSE や他のデータベースを購読できるのだと思
います。

もう一つ、これはイスラエルの英語のホームペ
ージです(図8)。MALMAD とは「the Inter-University
Center for Digital Information Services」で、
「MALMAD provides modern digital information
services more efficiently and at a lower cost
per-user by inter-university cooperation and pooling
of resources」とあります。こういう姿勢が見られるわ
けです。

そして、「Japan」をクリックしますと、紀伊國屋書
店のホームページに行きます(図9)。随分印象が違う
ように思いますので、先ほどのオーストラリアやイス
ラエルのような取り組みに向けて、SPARC が先頭に
立っていただくことを切にお願いします。個人的な意
見ですが、そうしないと、発信の経路が徐々に開くど
ころか、もっと狭められてしまうのではないかと懸念
してなりません。

ご清聴ありがとうございました。



(図9) 紀伊國屋書店(日本)のホームページ